

ネオ「敬老思想」

金子恵妙（社会福祉士・大学院生）

大井玄先生、この度は貴重なお話をありがとうございました。認知症の症状は、生老病死という人生の大きな流れのなかに存在している生活障害であること、どこか違い世界に行くのではなく私たちと同じ世界に住んでいる生活者であることという先生の言葉に感銘を受け、自分もまたそういう道筋をたどっていくことを素直に受け入れることができた1時間半でした。

父を5年前に亡くしました。もしあの時先生のお話を聞いていたら、もっと父の話に耳を傾け、認知能力が落ちてきた父をおおらかに受け入れられたのではないかと思います。父は新聞販売店を営む家の長男に生まれました。大学進学のため上京をしようというタイミングで、祖父が病に倒れたために、18歳で家業を継ぐことを強いられた人でした。人とのコミュニケーションは苦手で、不器用で、でも私たち家族にはとてもやさしい人でした。それが、晩年は人が変わったように怒りっぽくなり、周りを困らせていました。今回先生のお話を聞いて、父のその変化が少し理解できたように思います。認知能力の衰えによって生じた不安が父を怒りっぽくさせ、でもそれを理解していない家族が「厄介者」扱いし、それがまた父をいら立たせていたのかもしれない。

父は自身の悔しい思いもあったのか、私が結婚した後も出産後もいつも何かを学びたがることを応援してくれる人でした。この私が大学院生として大井先生の生講義を受け、その内容に感銘を受け、父の最期を思い出している。そのことを父は何より喜んでくれていると思います。

先生が紹介して下さった研究や論文のなかでも特に興味深く感じたのは、沖縄・読谷村と東京・杉並区を比較した「周辺症状の起きる社会・起きない社会」のお話でした。高齢者の「誇り」を保つための敬語のシステム、生活者としての役割が残っているというお話に、都会のせわしない暮らしは進化ではなく退化なのではないかと感じました。そして改めて私たちは高齢者を敬う文化を取り戻すべきだと思いました。

効率的かどうか、無駄はないか。そんな物差ししか持たないことは、人の「老い」だけではなく、自らの「老い」も受け入れがたくなることだと思います。今や「敬老」という言葉は祝日名と化しつつあります。先生が教えて下さった認知症の本質に基づき改めて「老い」を捉え直すことで、

この息苦しい社会に風穴を通すことができるのではないかと思います。この社会が一旦は手放してしまった「敬老思想」を今もう一度先生の理論に基づいて捉え直す。私はこの「ネオ敬老思想」ともいえる考え方をぜひ多くの人に持ってもらいたいと思います。

その柔和なお顔、語り口、そして豊かな教養と見識にすっかり心を打たれ、今さらですが、ファンになりました。またぜひ先生のお話をどこかでお聞きしたいと思います。このたびは貴重なご講義ありがとうございました。